

日本文典

下卷

4a  
815  
大5

42678 ✓

教科書文庫

4.  
815  
44-1976  
20000  
86997

Kodak Gray Scale



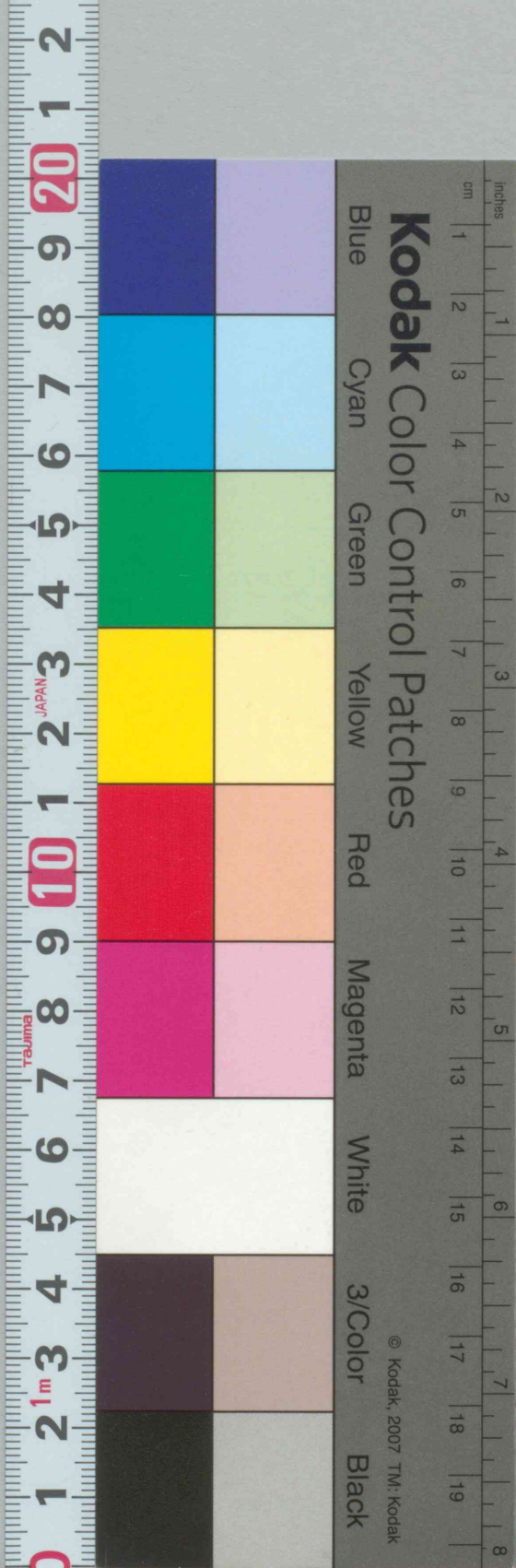
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black





4a  
815  
大5

文部省檢定濟

大正五年二月十三日

# 日本文典

下卷

京都帝國大學  
文學士吉澤義則著  
文科大學助教授

東京修文館藏版



日本文典 下卷

目次

第一章	動詞と助動詞との連続	一
第二章	助動詞相互の連続	一六
第三章	動詞の用法	二二
第四章	活用語の音便	三三
第五章	品詞の轉成	三八
第六章	文の主成分・句・成語	四四
第七章	文の補助成分	四八
第八章	文の各成分の種類(その一)	五三
第九章	文の各成分の種類(その二)	五七

日本文典





第十章	文の成分の位置……………	六〇
第十一章	文の成分の倒置及びその省略……………	六六
第十二章	文の性質上の分類……………	六九
第十三章	文の組織上の分類……………	七三
第十四章	係結……………	八二
第十五章	文の解剖……………	八七
附録	文法上許容すべき事項……………	一

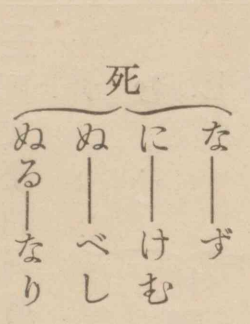
目次終

日本文典 下卷

文學士 吉澤義則 著

第一章 動詞と助動詞との連続

動詞と助動詞との連続



右の例中ずは將然形に、けむは連用形に、べしは終止形に、なりは連體形に連続せるを見る。かく助動詞の動詞に



文語動詞  
將然形に  
連る助動  
詞

連るには各々一定の慣例あり。今左にこれを文語・口語  
に分ちて説明せんとす。

〔三〕 文語動詞將然形に連る助動詞

ずざりじ

むまし

しむ

まほし

動詞全部

る 四段・奈行變格・良行變格の動詞

らる 加行三段・佐行三段・上下二段  
上一段・下一段の動詞

す 四段・奈行變格・良行變格の動詞

さす 加行三段・佐行三段・上下二段  
上一段・下一段の動詞

右の中しむの得鑄着煮見射爲などに連る場合及びさす  
の爲狩す罪す感す任す期す運動す等佐行三段動詞に連  
る場合は最も誤り易きものなれば、左に正誤を示すべし。

正

誤

[得]え [鑄]い [着]き [煮]に [見]み [爲]せ  
しむ

えさ いさせ きさせ にさせ みさせ せさ  
しむ



正

許容

〔爲〕  
狩せ  
感ぜ  
期せ  
さす

〔爲〕  
狩○  
感じ  
期○  
さす

〔三〕 口語動詞將然形に連る助動詞

口語助動  
詞將然形  
に連る助  
動詞

ぬ(ン) ない 動詞全部

まい 四段以外の動詞

う 四段の動詞

よう 四段以外の諸動詞

れる 四段の動詞

られる 四段以外の諸動詞

せる

四段の動詞

させる

四段以外の諸動詞

右の中させるの佐行三段の動詞に連るには特別の慣例あり。次に示すが如し。

任じぜ  
信じぜ  
〔爲〕  
期○  
運○  
動○  
させる

右に見るが如く、佐行三段活用動詞の中ザ行に活用するものゝ外は、皆その語幹に連續するものなり。

〔注意〕一 可能助動詞が上下一段活用の動詞に連る際



見(み)れる  
受け

と誤用する事有り。注意すべし。

二 まい<sup>ない</sup>ようが佐行三段活用動詞の將然形に連る場合

爲(せ)ない  
まい  
よう

の如くするは誤にて必ず

爲(し)ない  
まい  
よう

とすべきなり。注意すべし。

練習

(甲) 左の例に就いて誤を正せ

- 一、何うしてもせ<sup>ない</sup>わけには参りませぬ
- 二、最後には彼に任<sup>せう</sup>と思つて居るけれどまだく<sup>す</sup>早いやうで
- 三、見るまし<sup>ば</sup>聞きまし<sup>ば</sup>と思ふ事ぞ多かる
- 四、人をして見せしめしかど既にあらざりき
- 五、義經那須宗高をして扇眼を射さしむ
- 六、つくぐと御覽じさせ給ふ
- 七、侍臣をして蹴らさせ給へり
- 八、明日花見に行かむと人していはさせたり
- 九、望遠鏡さへあればよく見れる
- 一〇、彼は何處へも行かまいとおもふ







口語動詞  
の連用形  
に連る助  
動詞

〔五〕 口語動詞の連用形に連る助動詞

た  
なさる ます  
たい  
たからう  
動詞全部

多行・波行・良行の四段活用動詞のたに連るには借るの外は皆其の語尾を促音に變ずるものなり。

言つた 買つた  
勝つた 立つた  
取つた 有つた  
借りた

練習

〔甲〕 左の文について誤を正せ。

- 一、 敵兵はこゝにも來きと聞くは實か
  - 二、 的の真中通して射りければ皆人ほめはやしけり
  - 三、 はたと蹴りたる音ばかりしてまた静寂にかへりぬ
  - 四、 早く仕上げんとて勉強しゝかども未だ半にも至らず
  - 五、 陰日向なく勉強せなざるやう願ひます
- 〔乙〕 完了助動詞ぬと動詞連用形とのつき方を問ふ。
- 〔丙〕 左の動詞を用ゐて過去時の文語文を作れ。
- 來 示す 罪す

文語動詞  
の終止形  
に連る助  
動詞

〔六〕 文語動詞の終止形に連る助動詞

らし らむ  
べし 可能  
推量  
まじ  
良行變格以外の動詞全部



右の助動詞は良行變格の動詞に限り、その連體形に連續すること左の如し。

富貴にして驕らざる者少なかるべし。

飢にせまれる者や有るらむ。

(注意) 一、少なからむ有らむなどは少なかり有りの將然形にむの連れるものにして、らむの連れるに非れば混同すべからず。

二、べしが二段の動詞に連る際に

受けべし 捨てべからず

起くるべし 落つるべし

受くるべし 捨つるべからず

又加行佐行兩變格の動詞に連續する場合に

來るべし 爲るべし

の如く誤用せらるゝこと多し。注意すべし。

口語動詞の終止形に連る助動詞

(七) 口語動詞の終止形に連る助動詞

らしい 動詞全部

まい 四段の動詞

練習

(甲) 左の文について誤を正せ

一、花咲かば告ぐるべし

三、らしまじの加行佐行兩變格及び二段の動詞に連る際に

來るらし 爲るまじ

起くるらし 落つるまじ

受くるらし 捨つるまじ

落ちまじ 捨てまじ

の如く誤らるゝこと多し。注意すべし



文語動詞  
の連體形  
に連る助  
動詞

二、餘は彼の二艘の舟に分乗するらむ

三、今は彼の資財も盡くるらし

四、濱の眞砂の数は盡きまじ

五、陳列品に手を觸れべからず

〔乙〕 左の動詞を用ゐて助動詞べしに連る文を作れ

任す 捨つ 起く 報ゆ

〔丙〕 左の動詞を用ゐて助動詞まじに連る文を作れ

罪す 受く 植う 強ふ

〔八〕 文語動詞の連體形に連る助動詞

なり

動詞全部

如し

〔九〕 口語動詞の連體形に連る助動詞

である だ です

動詞全部

でござります

以上の助動詞が動詞の連體形に連る時には助詞のを媒とすること多し。

〔一〇〕 文語動詞の命令形に連る助動詞

り 四段及び佐行三段の動詞

完了助動詞のりは四段及び佐行三段以外の動詞には決して連ることなし。されども

異なりを

異なれり

と用ゐることは許容せらる。

練習

〔甲〕 左の文に誤あらば正せ。

一、わが蹴れるボール高く上りて校門を超えたり



- 二、去年三月彼よりの書面を受けり
  - 三、三箇の異なる文を作れ
  - 四、彼は吾をすゝめて弟と共に船に乗せり
- (乙) りを用ひて文三箇を作れ

### 第二章 助動詞相互の連結

助動詞相互の連結

(二)

[イ][口] 宮は兵士を集め給ひて懇にねぎらはせ給ひたりき  
 もう花も咲いたらうと仰せられまして今朝早くお  
 出かけなさいました

助動詞は右に示せる如く相互に連結して、更に複雑なる意味を表すに用ゐらるゝ事あり。而して其の連結の形

は概ね動詞と助動詞との連続する場合に同じ。即ち前例に於いて、給ひは動詞の連用形につゞく助動詞なれば、また尊敬助動詞すの連用形せにつゞき、たりき共に動詞の連用形につゞく助動詞なれば、また助動詞給ふたりの連用形給ひたりにつゞき、口語うは動詞將然形につゞく助動詞なれば、また助動詞たの將然形たらにつゞき、まじは動詞の連用形につゞく助動詞なれば、また助動詞られるの連用形られ及びびなさるの連用形なさりのい音に轉じたるなさいにつゞきたり。

助動詞はかく相互に連結して、複雑なる意義を生ずれども、其の一語一語の意義だに明らかにせば、自然了解せらるべきなり。然れば以下主要なる助動詞の重用に就き



現在完了時

てのみ説明せむとす。

〔三〕 現在完了時

(イ) 月は今中天に登つた

(ロ) 折しも少女等は聲を合せて歌ひぬ

右の例は完了の助動詞が單獨に用ゐられたるものにして、今正に動作の了れるを表せるものなり。これを現在完了時といふ。

〔三〕 過去完了時

(ハ) 其の時彼は既に出立したりけり

(ニ) 昨夏の洪水にもこの橋は落ちにき

右の如く完了の助動詞と過去の助動詞と連用せらるゝときは、已に以前に於いて動作の終了せしことを表すも

過去完了時

未來完了時

のなり。これを過去完了時といふ。

〔四〕 未來完了時

(ホ) 明日明後日の程にはこの文作り終へてむ

(ヘ) 余が歸り來む頃には花も咲きなむ

右の如く完了の助動詞と未來の助動詞と連用せらるゝときは、動作が將來の或る時期に於いて成し遂げらるべきことを表すものなり。これを未來完了時といふ。

〔二五〕

口語の過去及び未來の完了時

(イ) 私が行つた頃には式はもう終つてゐた

(ロ) 成績表は昨日から出してあつた

(ハ) 君が行く頃には戦争は濟んでゐるよう

(ニ) 明日まではまだ揭示してあるだらう



推量の  
完了時

口語に於いては、完了の助動詞の中であるてをるてであるの形に過去又は推量の助動詞を加へて、過去完了又は未來完了の時を示す。

〔二六〕 推量の完了時

(ホ) 船は着いてゐるらしい

(ヘ) 彼の畫も昨日今日の程には出来たるべし

右の例は完了時の助動詞に推量の助動詞の結びつきたるものにして、動作の終了したることを推量せるものなり。

推量の過  
去完了時

〔二七〕 推量の過去完了時

(イ) あの時はもう來てをつたらうか

(ロ) 秋や來にけむ袂吹く風も涼しくなりぬ

右の如く完了助動詞に過去推量の助動詞を加へて、或る時期に已に終了したりしことを推量するに用ゐる。

(練習)

ぬたりけりきけむらむむべしを用ゐて過去完了時未來完了時推量の完了時及び推量の過去完了時を含むる文を作れ。

〔二八〕

(イ) 十分注意致しますでござります

(ロ) またお遊びにお出でなさいまし

(ハ) 馬を陣頭に進めさせらる

(ニ) 龍顔うるはしく還御あらせ給ふ



敬讓助動詞は右に示せる如く、更に敬讓の意を深くするため、屢々重用せらる。而してすさすは獨立して敬意を表すこと無く、必ず他の敬語と連結して用ゐらるゝなり。

(練習) 左の問に答へよ

- 一、敬讓助動詞を擧げよ
- 二、敬讓助動詞を單用して、文、口兩語文を作れ
- 三、敬讓助動詞を重用して、文、口兩語文を作れ

助詞の用法

### 第三章 助詞の用法

(一九) ば

(イ) 其を讀まば理自ら明かならむ

(ロ) 書を讀めば知識を得

(ハ) かゝる書を讀めばこそ惡念も萌すなれ

助詞のばに連る動詞の語尾に二種あること、右の例に見るが如し。即ちイは將然形より、ロ・ハは既然形より連續するものにして、形容詞、用辭に於いても、其の連續の狀動詞に於けると同じ。

而してイは假想條件を、ロは既定條件を、ハは理由を表せるものなり。今これらを口語にて表さむ。

(ニ) 其れを讀めば

其れを讀むなら

書物を讀めば

書物を讀む



(へ) かやうな書物を讀むから

(注意) 右の如く口語に於いてはばに連る活用形は假想既定共に同じければ、文語に於いても屢々混同して誤用すること多し。注意すべし。

[10] ならからとたら

前項ニへの例に見るが如く、ならからは用言・用辭の連體形に、とは終止形に連る助詞なり。

ならからは文語に用ゐらるゝことなしと雖も、とは文語にも用ゐられ、

(イ) 花有り。通知りなば

(ロ) 人く。ご告ぐ

の如く、連續法もまた口語と同じ。

其の他ごもごてごしては皆ごに同じく活用語の終止形を受く。

(注意) 口語活用語の終止形は連體形と其の語尾同じきを以て、これに誤られて、

花有ると 人くると

花有るとも 人くるとも

と爲ること多し。注意すべし。

然れども

勉むると勉めざるとの別

白きと赤きと緑なるとあり

の如く、活用語が二箇以上のを以て結合せらるゝ場合には、これらの活用語は體言格と見るべきものにして、連體形にてごに接續す。



また口語に

- (イ) 昨日見ておいたら良かったのに
- (ロ) もう少し早かつたら間に合つたらう
- の如く過去の假想条件を示す助詞あり。此のたらは
- (ハ) 催促したら返すだらう
- (ニ) 美しかつたら買ひませう
- の如く、單に假想条件をも示し、
- (ホ) 催促したら良いではないか
- (ヘ) 天氣が良かつたら來るに定まつてゐる
- の如く、既定条件を表すにも用ゐらる。

練習

(甲) 左の誤を正せ

- 一、一足早く行きしなれば見らるべかりしものを。
- 二、死ぬと生くとの界なり
- 三、昨日訪ねたらば彼は不在なりき
- 四、明日までに若し用事終れば參るべし
- (乙) 候へば候はゞ見ば見れば早くば早ければを用ゐて文語文を作れ。

(三) だにすらさへ

- (イ) 我れだに訪はずば可なり
- 遺物を見てだに憚ばむ
- 聞くだに身の毛もよだつ思ひあり
- (ハ) 禽獸すら恩を知る
- (ニ) 此の聖代にてすら此の事あり
- (ホ)



だにすらは共に一端を擧げて他を想はしむる助詞にして、種々なる語に連続す。今これを口語に譯せむ。

(へ) 我れさへ訪はなければ

(ト) 遺物を見てなりと偲ばう

(チ) 聞くさへ身の毛も

(リ) 禽獸さへ恩を知つてゐる

(又) 此の聖代でさへこんな事がある

右の如く、文語のだにすらは多く口語に於けるさへに相當する助詞なり。

文語にも別にさへといふ助詞あり。例へば

(イ) 橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいやと  
こはの木

(ロ) 雨降りしきり風さへ吹きつのもりぬ

等にて、物事の添加する意味を表す助詞にして、これらを口語に改むれば、

(ハ) 橘は實も花も葉までも

(ニ) 雨が降りしきる上に風まで

となり、口語のさへと全く異なるを見る。

(注意) 文口兩語のさへを混同して文語にだにすらといふべきをさへと誤ること多し。注意すべし。

三三 なむ

(イ) 鳥も鳴かなむ

(ロ) 今は二條の院におはしましなむ

右二例の中イのなむは動詞將然形に連り、ロのはその連



用形に連なれり。前者は希望を表す助詞にして、後者は  
未來完了時の助動詞なり

(注意) この兩助辭は形同じきを以て屢々混同せられ、その連續法を  
誤ること多し。注意すべし。

なむといふ助詞また別にあり。例へば

(ハ) 夜なむ來ける

(ニ) 君を見るなむうれしき

(ホ) 人をば羨むまじとなむ

等にして、こそぞと同じく指定の意味を表す助詞なり。  
この助詞は種々の語に連り活用語にはその連體形を受  
く。  
これらのなむは口語には無し。

二三 かや

(イ) 花か咲きぬる

(ロ) あるかなきか

(ハ) 雪とか見るらむ

(ニ) 第一號かと存じ候

右のかは種々なる語に連りて、疑ひの意味を表すことや  
と同じ。但しかは活用語には其の連體形に連ると雖も  
やは

(ホ) 有りや無しや

の如く、その終止形に連る。また疑問の副詞ある時には

(へ) 何か常なる

(ト) 幾。何かある



の如く、やを用ゐずしてかを探るを常とす。口語には疑問のやなければ疑問の意味は皆かにて表さる。

や にはまた別に

(チ) いみじくぞあるや

(リ) 玉や貝やと拾ひ給ふ

の如く咏嘆並列の意を表すものあり。並列のやは口語にも常に用ゐらるゝこと、

(又) 梅や櫻を植ゑたの如し。

その他助詞は數甚多く、用法も繁ければ、中に最も誤り易きものを擧ぐるに止めつ。

(練習)

- 一、三種のなむの活用語に連る形を示せ
- 二、だにすらさへを用ゐて三文を作れ
- 三、動詞形容詞助動詞に連れる疑問のやを用ゐて三文を作れ

第四章 活用語の音便

(三四)

い音便

(イ) い音便

開	磨	指	開	磨	指	開	磨	指
き	ぎ	し	い	い	い	い	い	い
たり	たり	たり	たり	たり	たり	たり	たり	たり
て	て	て	て	て	て	て	て	て
文			口					



う音便

(口) う音便

(注意) 地方によりては指してを指いてといふことありと雖も、今は東京口語に依る。口語は總て東京語に従ふ。

善きかな 善いかな 善い事  
珍らしきかな 珍らしいかな 珍しい事  
きぎしの語尾を有する四段活用の動詞がてたりに連続する時、又は形容詞類がかなに連る時は、語尾のきぎしはいに轉ずることあり。これをい音便といふ。

文

言ひてたり  
逢ひてたり

言うてたり  
逢うてたり

口

○ ○

撥音便

(ハ) 撥音便

早くて讀む 早うてて讀む 早くて讀む  
大人らしくて 大人らしうて 大人らしくて  
歩む 歩む 歩む  
右は活用語のひ或はくのう音に轉ぜるものなり。これをう音便といふ。  
口語には右の如きう音便は無し。但しめでたし有りがたし等は  
おめでたうございます  
有りがたう  
の如く、う音便をとる。  
(注意) 以上音便のいは皆阿行の假名なり。



促音便

死に たり      死ん だて      死ん だて

飛び たり      飛ん だて      飛ん だて

読み たり      讀ん だて      讀ん だて

右の如く動詞語尾に**びみ**の撥音に轉ずることあり。これを**撥音便**といふ。

(二) 促音便

口語打消の助動詞ぬは撥音に轉ずるを常とす。

文      口

行き たり      行つ たて

(練習)

持ち たり      持つ たて

買ひ たり      買つ たて

残り たり      残つ たて

口語に於いては動詞語尾**ちひり**の促音に轉ずる現象あり。これを促音便といふ。

語尾きの促音に轉ずるは**行く**の一語に限るが如く、又語尾りの中にも**借る**の一語は音便を取ることなし。

(注意) 地方によりては語尾ひはう音便を取り思つて買つてといふ。

- 一、波行四段活用及び佐行四段活用の動詞の過去の助動詞に連るものを用ゐて口語文を作れ



二、形容詞の副詞形を用ゐて口語文を作れ。

第五章 品詞の轉成

品詞の轉成

(三五)

- (イ) 殿下の御勤勉は申すもかしこし。
- (ロ) 今日の仕合ひには僕も出ます。
- (ハ) 明日は何番に御立ちです。
- (ニ) 一門喜びに充ち満てり。
- (ホ) 見ると聞くとは大變に違ふ。
- (ヘ) 善いが悪いのか悪いが善いのか分らない。
- (ト) 白の衣服は清くて善い。 けれども直に汚れるから困る。

- (チ) くりかへし頼んでおいた。
  - (リ) 明日開會の旨申上候處公用出來致候間明後日に延期致すべく候
  - (又) 彼は英語佛語及び露語に通達せり。
- 右の文中殿下僕は名詞より代名詞に、何番の何は不定代名詞より不定數詞に、仕合ひ喜び見る聞くは動詞より、善い悪い白は形容詞より名詞に、くりかへしは動詞より副詞に、けれどもは接續の助詞より、處間は名詞より及びは動詞よりそれく接續詞に、候は動詞より助動詞に轉成せるなり。

(三六)

- (ル) 誠に國家の慶事なり



(フ) 甚寂しげに見ゆ

(ワ) 温みが無い

(カ) 今日の穩さは別段だ

(ヨ) 目もて見るここ能はず

右の文の中誠に及び前項ホの大變には名詞に助詞にの添ひて寂しげは形容詞語幹に助詞げの添ひていづれも副詞に、温みは形容詞語幹に助詞みの添ひて、穩さは副詞に助詞さのそひて、見ることは動詞に助詞この添ひていづれも名詞に轉成せるものなり。

三七

(タ) 勉強す 譯す

(レ) 読み書きす 釣りす

(ソ) 任ず 重んず

(ツ) 利口ぶる 高ぶる

(子) 早む 怪しむ

(ナ) 多からず 樂しがる可し

(ラ) 未練らし

右の中夕の例は名詞に、レの例は轉成の名詞にいづれも助詞すの添ひて、ソの任ずは名詞に、重んずは轉成の名詞にいづれも助詞すの添ひて、利口ぶるは名詞に、高ぶるは形容詞語幹にいづれも助詞ぶるの添ひて、子の例は形容詞語幹に助詞むの添ひて、ナは形容詞語幹に助詞からの添ひていづれも動詞に、未練らしは名詞に助詞らしのそひて形容詞に轉成せるものなり。



右タレツの例は佐行三段に、ツの例及び怪しむは四段に、早むは下二段に、ナのは良行變格に、ラの例は形容詞的に活用す。然れども多かり樂しかり等は已然形を闕く。

(三六) 前項の諸例を口語に改むれば

勉強する 三佐

譯す 四

読み書きする 三佐

釣りする 三佐

任じる 一上

重んじる 一上

利口ぶる 四

高ぶる 四

早める 下

怪しむ 四

未練らしい 形

の如し此の中注意すべきは文語佐行三段活用の動詞が口語に於いては種々に活用することなり。而してかり

は口語には全く無し。

(練習) 左の文中より轉成せられたる品詞を摘出せよ

- 一、出来る限り早く、今にもやつてほしい
- 二、男らしくも無いでは無いか
- 三、苦いのやら酸いのやら、わけのわからぬ味だ
- 四、嬉しさの餘りに傷の痛みも忘れて萬歳を連呼せり
- 五、思はしからぬ點も多けれども彼が如何に苦心せしかは察せらるゝなり
- 六、いたくしい程瘦せて重量も僕の半分しかない
- 七、小生からも御頼み致しますが貴君からも間違ひの無いやうに御口添へを願ひます
- 八、疑は怒となり遂に戦となりぬ
- 九、御目には涙を浮べさせ給ひてなつかしげに見やらせ給ふ



一〇、時候も大いに春めいて気分ものびくして来た

### 第六章 文の主成分・句・連語

主語  
述語

#### 〔三九〕 主語・述語

- (イ) 犬が吠える
- (ロ) 小兒眠る

完全なる文は必ず叙述の題目となる語とこれを叙述する語とを具へざるべからず。犬が小兒は叙述の題目にして、これを文の主語といひ、吠える眠るはそれ〴〵題目につきて叙述せる語にして、これを述語といふ。主語及び述語を文の主成分といふ。

句

#### 〔三〇〕 句

連語

#### 〔三一〕 連語

- (ハ) 花咲き鳥歌ふ
- (ニ) 花が散つてからは一人も来る者が無くなつた
- 花咲き鳥歌ふ花が散つて来る者が無くなつたは皆主語・述語を具ふるを以て、完全なる文なり。而して、是等の小文は相寄りて更に大なる文を構成せること、右の例に見るが如し。
- かく、文にして更に大なる文を構成する材料となれるものを句といふ。花咲き来る者が無くなつた等は句なり。
- (ホ) 世界の中で萬世一系の帝王を戴いてゐるのは我が國ばかりだ
- (ヘ) 彼は理學者として世界にその名を知られし人なり



ホの世界の中で萬世一系の帝王は共に二語以上連結して、一團を成せりと雖も、主語述語を完備せざれば句に非ず。かく句を成さざる語の團結を連語といふ。理學者として世界にその名を知られし人の如きは、語數多く、形も複雑なれども、主語述語を完備せざるを以て連語なり。

三三

(ト) 世間に遠ざかるのが、必しも悪いとは言はない。  
(チ) 昨日敗れしは、彈藥の補充十分ならざりし故なり。世間に遠ざかるのが、昨日敗れしは一見連語の如しと雖も、實は主語が省略せられて表されざるまでにて、主語無きにはあらず。されば是等の文を解釋せむには

(君が)世間に遠ざかるのが

昨日(我が軍の)敗れしは

の如く、主語を補ひて考へざるべからず。即ち何れも句なり。是に反して前項の諸例は主語又は述語を加ふること全く不可能なり。

(注意) 文の成分の省略の事は後に説くべし。

〔練習〕 左の文について句及び連語を指摘せよ。

- 一、 鏡のやうな月が松の間に見える
- 二、 急がば廻れ
- 三、 雨の降る日は二割増の賃金をいたゞきます
- 四、 昨夜から考へてゐますがどうも分りませぬ



- 五、ダリヤは極めて色の種類に富める花なり
- 六、君は知らぬといふが確な證據があるから止むを得ない
- 七、人の多きは却つて統一を缺く虞あり
- 八、さらば參らむとてうち連れて出で行きけり
- 九、委しきは此の書なれど余は寧ろ新説多きものを求めむ
- 一〇、花より團子と昔からいふでは無いか

### 第七章 文の補助成分

修飾語

〔三三〕 修飾語

- (イ) この花は大變に美しい
- (ロ) 美しき花咲く
- (ハ) 清盛維盛をして頼朝を討たしむ
- (ニ) 彼は遂に議長に擧げられたり

提示語

〔三四〕 提示語

- 主語及び述語のみにては表さんと欲するところを盡さざることあり。この場合には主語・述語の意味を限定する補助語を要す。この美しきは主語を限定し、大變に維盛をして頼朝を遂に議長にはそれ〴〵述語を限定せるものなり。かゝる語を修飾語といふ。
- (イ) 旅順はその守り固し
  - (ロ) 山はもう花が咲いた
  - (ハ) 彼にしては出来が悪い
- 右の文に於いて主語は守り花が出来がなれども旅順は



接續語

〔三五〕 接續語

山は彼にしてはは、特に注意を要すべき語を標示せるものなり。  
かゝる語を提示語といひ助詞はを伴ふを常とす。

- (イ) 長距離競走・障碍物競走及び高飛びに勝てり
- (ロ) 十日に亘つて激戦が有りました。しかし勝敗は知りませぬ

右の文に於いて及びしかしは語文を接續せる語なり。  
かゝる語を接續語といふ。

獨立語

〔三六〕 獨立語

〔三六〕 以上修飾語提示語・接續語を文の補助成分といふ。

- (イ) 君海濱へ行きませうよ
  - (ロ) あはれ春も終りに近づきぬ
  - (ハ) 宮島橋立松島これを日本三景といふ
- 右の中君あはれ宮島橋立松島は何れも意味の上にて下文との關係あれども組織上何等の連絡もなく全く獨立標置せられたるものなり。かゝる語を獨立語といふ。

同格語

〔三七〕 同格語

- (イ) 爾臣民父母に孝に



- (ロ) 草莽の臣高山彦九郎謹んで奏す
- (ハ) 誰か同行者を探してゐる

右の例に於ける爾と臣民と誰かと同行者と草莽の臣と高山彦九郎とは互に同格の語なり。かゝる語を同格語といふ。

文にはかく同格語の含まるゝことあり。

(練習) 左の文に就きて修飾語提示語獨立語接續語及び同格語を指摘せよ

- 一、熱い湯瀧が盛に落ちる
- 二、皆さん先生が入らつしやいました
- 三、君あの雲は暴風の徴候だよ
- 四、數人の農夫が頻りに畑を耕してゐる
- 五、櫻の枝を切り、又松を根引きにす

主語の成立上の分類

(三)

主語の成立上の分類

- (イ) 天下麻の如く亂る
- (ロ) ベルが鳴つた
- (ハ) 君ご僕ごは竹馬の友なり
- (ニ) 花の美しきが咲きたり
- (ホ) 腦の良いのは一生の徳だ

第八章 文の各成分の種類 (その一)

- 六、君はお父さんそのままの顔してるよ
- 七、僕は山遊びが一番好きだ
- 八、閱覽人は音讀することを禁ず
- 九、最後の勝利は眞に實力ある人の手に歸す
- 一〇、山陰に遅れて咲ける花はあはれ観る人も無くて散り失せぬ



述語の成立上の分類

イ・ロの主語は單語、ハのは連語、ニ・ホのは句より成る。主語は分ちては主單語、主連語、主句と呼び、總稱しては主語といふ。

〔四〕 述語の成立上の分類

(イ) 日東山に出づ

(ロ) 雨が降つてゐるか

(ハ) 彼は弓の上手なり

(ニ) 雪の降ること、鵝毛の飛ぶが如し

イ・ロの述語は單語、ハのは連語、ニのは句より成る。

述語は分ちては述單語、述連語、述句と呼び、總稱しては述語といふ。

修飾語の成立上の分類

〔四〕 修飾語の成立上の分類

(イ) それは甘い話だ

(ロ) 水甚清し

(ハ) 川の面には紅葉の錦を布けり

(ニ) 彼には心から敬服してゐる

(ホ) バツチングの上手な選手です

(ヘ) 霜葉二月の花よりも紅なり

(ト) これは鹿の通ふ路です

(チ) 同情厚きを謝す

イ・ロ・ハ・ニの修飾語は單語、ホ・ヘのは連語、ト・チのは句より成れる例なり。



修飾語は分ちては修飾單語・修飾連語・修飾句と呼び、總稱しては修飾語といふ。

〔四〕

(リ) 黒い百合の花は珍しい。

(又) この模造品はまるで眞物そのまゝの出来だ。

(ル) 彈丸の飛ぶこと恰も雨の降るが如し。

(ヲ) 雨降らば花は散るべし。

リ・又の修飾語は連語を、ル・ヲのは句を限定せるものなりかく、形容詞的修飾語は連語を、副詞的修飾語は連語又は句を修飾することあり。

(練習) 左の文に見えたる主語・述語及び修飾語を指摘せよ。

一、滔々として世は奢侈に趨く

二、今日喜ぶべき情報が到来した

三、友の留學の途に上るを送る文を作れ

四、極めて陰險なる人物なりと聞く

五、御世辭の善いのは油斷がならぬ

六、あの飛行機は鳥が飛ぶより早いやうだ

七、一番大事なものといふのは何だらう

八、利益を得ることばかり考へてはいけない

九、美しき菊の花咲くべき秋は來ぬ

第九章 文の各成分の種類(その二)

〔四〕 提示語の成立上の分類

提示語の  
成立上の  
分類

(イ) 色は紫が可し

(ロ) 瓜の培養は柴田最も巧みなり

(ハ) 子供の弱いのは一つは親が不注意なからだ



接續語の  
成立上の  
分類

イの提示語は單語、ロのは連語、ハのは句より成れり。  
提示語は分ちては**提示單語**、**提示連語**、**提示句**といひ、總稱しては**提示語**といふ。

〔四〕 接續語の成立上の分類

(イ) 飲み且つ啖ふ  
(ロ) 且つは歌ひ且つは舞ふ  
(ハ) 君は然りといひ、彼は然らずといふ。 かるが故に余は躊躇せるなり。  
右の例に於いて、**且つ且つ**は單語、かるが故には連語より成れる接續語なり。  
接續語は分ちては**接續單語**、**接續連語**と呼び、總稱しては

獨立語の  
成立上の  
分類

接續語といふ。

(注意) 接續語には句より成るものなし。

〔五〕 獨立語の成立上の分類

(イ) あ、萬事休す  
(ロ) 神よ幼き吾が子に幸あらせ給へ  
(ハ) 吾が親愛なる諸子、諸子は今や業を終へて故郷に錦を飾らむとす  
(ニ) 和船で太平洋を横斷するそんな無謀な事があるものか  
イ・ロの獨立語は單語、ハのは連語、ニのは句より成れり。  
獨立語は分ちては**獨立單語**、**獨立連語**、**獨立句**と呼び、總稱しては**獨立語**といふ。



(練習) 左の文に就いて提示語・獨立語・修飾語を指摘せよ。

- 一、進め今は瞬時も躊躇すべき時ではないぞ
- 二、我が大隊は今より突撃に移らむとす
- 三、行くと歸るとは心持ちが大分違ふ
- 四、酒と煙草とは養生に害有り
- 五、山田佐藤小川、この三人は少し待つてゐなさい
- 六、堯舜を知るものはそれ堯舜か
- 七、これには深い仔細が有ります
- 八、そんなことをあなたは誰に御聞きでした
- 九、今は翼なくして空中を飛行する術すら工夫せられたり
- 一〇、これなむ名に負ふ松島の景色なる

### 第十章 文の成分の位置

主語述語  
の位置

〔四〕 主語述語の位置

- (イ) 蛙が鳴く。
  - (ロ) 性質温順なり。
- 文の各成分を配置するには、それ／＼一定の順序あり。而して普通の文に於いては、右に見るが如く、主語は上に述語は下に置かるゝものなり。

修飾語の  
位置

〔五〕 修飾語の位置

- (イ) 君の叔父さんは大臣に成るのかい。
- (ロ) 大變大きな鯉が跳ねて、波紋が靜かな水面に廣がる。右に示せる如く、修飾語は被修飾語の直上に在るを常とす。

〔四六〕



(イ) 細い長い線  
長い細い線

(ロ) 黒く遅しき馬  
遅しく黒き馬

(ハ) 右に左に切り拂ふ  
左に右に切り拂ふ

(ニ) 紙を細く長く切る  
長く細く切る

右の例に見るが如く、同一語に二個以上の同格の修飾語の加へらるゝ時には、主要なるもの前に來るを常とす。されども、その度全く相同じき時は、口調によりて互に前後するものなり。

〔兎〕

(イ) 赤く小さく美しき鳥 赤く小さく美しい鳥

(ロ) 黒く大きな牛 黒い大きな牛

(ハ) 赤き小さく美しき鳥 赤い小さい美しい鳥

〔五〇〕

同一語に二箇以上の形容詞的修飾語の加へらるゝ時、文語に於いてはイ・ロの形式普通にしてハの如きは稀に、口語に於いてはロ・ハの形式普通にしてイの如きは少なし

〔五一〕

(イ) 今日の午前七時に動員令が出た

(ロ) 明治四拾五年七月參拾日明治天皇崩御あらせ給ひき

時を示す副詞的修飾語は文首に置かるゝ事多し。



(注意)

美しい鳥が大きな松の枝にとまつた

本日決勝戦あるやうに聞き及び候

右の文に於いて大きなは松の修飾語とも枝の修飾語とも見られて紛はし、故に若し枝を修飾するものならば、これを枝の直上に置くべし。

また本日は有りの修飾語とも聞き及ぶの修飾語とも聞えて紛はし、故に若し聞き及ぶを修飾するものならば、これをその直上に加ふべし。

(練習)

左の語につきて修飾語の位置を研究せよ

- 一、活潑なる精神は健康なる身體に宿る
- 二、今日出發せりと聞きたり
- 三、たくましき君が腕かな
- 四、非常に運動したのでたつしやになつた

五、正直な彼の子供は賞せられた

提示語の位置

(五) 提示語の位置

- (イ) 山は富士山が第一だ
- (ロ) 君には海濱が適したり

右に見るが如く、提示語は主語の上に置かる。

接続語の位置

(五) 接続語の位置

- (イ) 山又山を越え過ぎぬ
- (ロ) それもよからう然しもう一度考へ給へ

接続語は接続せらるべき語句等の間に置かる。

獨立語の位置

(五) 獨立語の位置

- (イ) 瓢や瓢や我汝を愛す
- (ロ) 而して今や亡しあゝ



(ハ) 招くとてたちもとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる  
花薄かな

右見るが如く、獨立語は或は文首に或は文後に或は文中に置かれて位置一定せず。然れども文首に在るを最も普通とす。

(練習)

- 一、單語連語及び句より成る副詞的修飾語を用ゐて各一文を作れ
- 二、形容的修飾語を重用して二文を作れ
- 三、獨立語を用ゐて三文を作れ

第十一章 文の成分の倒置及びその省略

成分の倒置

(五) 成分の倒置

- (イ) 死にましたか源君は
- (ロ) 杖を忘れて来た君の
- (ハ) お尋ねする試みに
- (ニ) 母は喜んだ泣いて
- (ホ) 勇しく彼は出征せり
- (ヘ) 大なるかな國家の恩

成分の位置は前章に説けるが如しと雖も、情調を表はすために、文意の明瞭を失はざる限り、成分の位置を種々に轉ずることあること右の例に見るが如し。かゝる現象を**成文の倒置**といふ。

(六) 文の成分の省略

文の成分の省略

而してこの現象は會話の際殊に屢々起る所なり。



(イ) 夏は殊に食物に注意する必要あり。(人々)  
 (ロ) 君の筆はあるが、僕のが無い。(筆)  
 (ハ) 犯人は直に捕へられました。(刑吏に)  
 (ニ) さらば無事に。(行け)

(ホ) 明日は柔道の仕合ひ明後日は端艇競漕がある。(あり)  
 (ヘ) 余が好むものは、春は花、秋は月なり。(にして)

文の成分又はその一部分は意味の不明に陥らざる範圍内に於いて省略せらるゝことあり。これを成分の省略といふ。右の括弧内の言辭は省略せられたるものなり。而して此の現象も對話の際に殊に甚しく現るゝなり。

(練習) 左の文中の成分を正位に復し、且つ省略せられた

る部分を補へ

- 一、お進みなさいすと前へ
- 二、繪を一枚かいて下さいこれを進呈しますから。
- 三、御覽なさいよい月が出ましたから
- 四、英語は伯父に數學は從兄に學び候
- 五、茫然自失すること多時
- 六、來れ吾が子ら花咲く野邊に
- 七、臺灣を取り樺太を加へ又朝鮮を併せて面積實に二倍となりぬ
- 八、青年の覺悟如何
- 九、酒は決して飲むべからず嘗に信用を害するのみに止まらざるべし
- 一〇、言ふことを止めよまた明年ありと

第十二章 文の性質上の分類



平叙文 (五七) 平叙文

- (イ) 急湍は處々瀧となつて落ちてゐる
  - (ロ) 昨夜の雨にて山々の雪も消えつらむ
  - (ハ) 君は滿洲に行くか
  - (ニ) 余輩豈努めざるべけむや
- 右の文中イは叙述の文、ロは推量の文、ハは疑問の文、ニは反語の文にして、いづれも事實の自然に叙述せられたるものなり。これを平叙文といふ。

命令文 (五八) 命令文

- (イ) 樹木を折り取るべからず
- (ロ) 復習を爲さらねばいけません
- (ハ) 汝は迂廻して敵の背面より攻めかゝれ

感動文

(五九) 感動文

- (ニ) 契約の履行を怠るな。
- 右に擧げたるは皆命令を表せるものにして、これを命令文といふ。
- 命令文には次の特色あり。
- 一、イ・ロの如く活用語はその終止形を以て終るものありと雖も、ハ・ニの如く命令形を以て終るを常とす。
  - 二、ハの如く特に識別する必要ある外は主語の省略せらるゝことイ・ロ・ニの如くなるを常とす。
- (イ) もうそんなに成るのかなあ、卒業してから
  - (ロ) 忠なる哉、楠氏
  - (ハ) あはれおもしろき月かな
  - (ニ) 君が心のありがたさよ



右に擧げたるは、いづれも感動を表せる文にして、これを感動文といふ。

感動文にも特色あること左の如し。

- 一、主成分の完備せざること、右の如くなるを常とす。
- 二、成分の倒置せらるゝこと極めて多し、イの如きはその一例なり。

右に説けるが如く、成分の倒置省略は文の性質に關係すること大なるものなり。

(練習) 左の文を性質上より分類せよ。

- 一、今や吾が國は世界の一等國となれり
- 二、なほ解決せられざる問題ありや
- 三、覺めよ諸君今や危急存亡の秋なり
- 四、春は來れども花咲かず
- 五、壯なるかな雲間を出でし日の影かくも勇ましく快き景色は他

にありとも覺えず

單文

(六〇) 單文

(イ) 冬が來た

(ロ) 日本は神國なり

右の文はいづれも主語と述語との關係一回成立せるのみなり。かゝる文を單文といふ。

(六一)

(ハ) 神は常に平和を愛す

(ニ) 彼は美しく咲きにほへる梅の一枝を折りたり

右の文中、ハの常には平和を愛すを、平和をは愛すを修飾

### 第十三章 文の組織上の分類



從主  
句句

する單語にして、**二**の美しく咲きにほへるは**梅**を修飾せる連語なり。  
單語は固より連語も亦主語述語の關係成立せるものに非ず。その關係は**ハ**に於いては**神**はと**愛**すと、**二**に於いては**彼**はと**折**り取りたりと各一回成立せるのみなり。  
されば右の例は複雑なりと雖も單文なること前項の例と同じ。

〔六〕 主句・從句

- (イ) 水清ければ魚住まず
  - (ロ) 諸君の努力あらむことを望む
- 右の文中、**イ**は**水**と**清**ければとに於いて一回、**魚**と**住**まずとに於いて一回、合せて主述語の關係二回成立せる文に

して、**ロ**は**余省略**と**望**むとに於いて一回、**諸君**のと**努力**あらむことをとに於いて一回、合せて主述語の關係二回成立せる文なり。  
而して**水清**ければは**魚住**まずを修飾せるものにして、**即ち魚住**まずといふ文の一分を成せるものなり。また**諸君の努力**あらんことをは**望**むを修飾せるものにして**即ち余望**むといふ文の一分を成せるものなり。  
かく他の句に從屬する句を**從句**といひ、**從句**を率ゐる句を**主句**といふ。

複  
文

〔七〕 複文

- (ハ) 水清ければ魚住まずといふ諺あり
- (ニ) 本校をして隆盛ならしめむがため大に努力あらむ



ことを望む

右のハに於いて、水清ければ魚住まずの副詞的修飾語、水清ければ魚住まずとはいふの副詞的修飾語、水清ければ魚住まずといふは諺の形容詞的修飾語にして即ち諺(主語)あり(述語)といふは主句に附屬せる従句なり。

ニに於いて、本校をして隆盛ならしめむがためは主語の省略せられたる句にして、努力あらんことをの副詞的修飾語即ち諸君の(省略)努力あらむことをといふ句の従句なり。而して本校をして隆盛ならしめむがため大に努力あらむことをは望むの副詞的修飾語にして余(主語)望む(述語)といふ主句に附屬せる従句なり。かく二箇以上の句を包有し、終局の主句一箇なる文を複文

竝立句  
合文

〔六〕 竝立句合文

といふ、即ち前項のイ、ロは簡單なる複文にして本項のハ、ニは複文を成分となせる複文なり。

(イ) 山青く水白し

(ロ) 鳥は池邊の樹に宿し、僧は月下の門を敲く

山青くも句にして、水清しも句なり。而してこの二句は互に獨立して、主従の關係なし。たゞ二句相依りて、或る地相を描けるのみ。

ロの例も二句の關係イと同じく、以て或る月夜の風景を寫せるものなり。

(ハ) 月高く、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ

(ニ) 妹は弾じ、兄は歌ひ、弟は舞ふ



右のハニも三句相集まりて、一は月明の景を叙し、一は兄弟和樂の狀を表せるものなり。かゝる句を竝立句といふ。

かく二句以上の竝立句より成る文を合文といふ。

〔五〕

(ホ) 山靜にして雲來去す

(ヘ) 月落ち鳥鳴いて霜天に滿つ

(ト) 雨は降るし風は吹くし加ふるに雷が鳴つてゐる

イロハニは皆竝立句が活用語の中止形によりて連結せる例なるが、ホヘトはその接續詞或は接續の助詞によりて連結せる例なり。

(注意) 夜更けて聞く鹿の聲は一層身にしむこゝちす

船大きにして海岸に近づくこと能はず

雨は降るし道は悪いしとうく遅刻してしまひました

てしてしによりて導かるゝものは、また右の如く附屬句として用ゐらる。この場合には形式の上にては獨立句と異なることなし。さればたゞ文勢によりて意味の上より此の兩者を辨別せざるべからず。

然れども是等は實は後にためにといふが如き接續詞の省略せられたるものにして、てしてしが後にためになどの意味を有するものにあらず。また

或は傷つき或は斃れ残れるは僅かなり

右の如く中止形によりて連結するものゝ中にも右同斷の場合あり。これも斃れたればといふべきを簡潔を貴びて、たればを略せるものなり。

是等は誤解を招く虞ある時には用ゐる可からず。

〔六〕

(チ) 太郎は英語を次郎は佛語を三郎は露語を學ぶ



(リ) あの人**は**身體も壯健で、學力もある  
**チ**は共通の述語を有する竝立句より成る合文にして、**リ**  
 は共通の提示語を有するものより成る合文なり。かく  
 竝立句が共通の成文を有するときは、その成分は一句に  
 のみ用ゐられて、他は往々省略せらるゝものなり。

〔六七〕

(イ) この論は引證該博にして、推理的確なれば必ず一讀  
 せざる可らず

(ロ) 先日の大決戦は露西亞が勝つたともいふし、獨逸が  
 勝つたともいふ

右の**イ**は合文を成分として成れる複文にして、**ロ**は複文  
 の集りて成れる合文なり。今これを左に説明すべし。

この論は引證該博なりといふ文と推理的確なりとい  
 ふ文とに共通なる提示語なり。即ちこの論は引證該博  
 にして推理的確なりといふ文は共通の提示語を有する  
 竝立句より成れる合文なり。而してこの合文は一讀せ  
 ざる可らずを限定する副詞的修飾語として用ゐられた  
 るものにして、一讀せざる可らずを述語とせる主句の一  
 成分なり。

**ロ**大決戦は露西亞が勝つたと獨逸が勝つたとの二句  
 に共通の提示語なり而して此の二句はいづれもいふを  
 限定する副詞的修飾語にして、いふを述語とせる主句を  
 構成せる成分なり。即ち露西亞が勝つたともいふも獨  
 逸が勝つたともいふも各複文なり。**ロ**の例はこの二複



文が對等の關係に於いて相合して、一文を成せるものなり。文を組織上より分類して、以上單文複文合文の三種となす。

(練習)

- 一、單文とは何ぞや
- 二、主句と従句との別を問ふ
- 三、連語を含める單文を作れ
- 四、複文を作れ
- 五、複文を含める合文を作れ

係  
結

第十四章

係  
結

(六)

- (イ) 月よし
- (ロ) 月なぞよき
- (ハ) 月こそよけれ
- (ニ) 人あり
- (ホ) 人やはある
- (ヘ) 人こそあれ

右の中イニは用言の終止形にて終止せりと雖も、他の四例は或は連體形或は已然形にて終止せり。而して終止形以外の形に於いて終止せる場合には、必ず一定の助詞の伴へること右の例に觀るが如し。  
今用言・用辭の終止の形を左右する助詞を表によりて示さむ。



- ぞ (指示)
- なむ (指示)
- や (疑問)
- やは (反語)
- か (疑問)
- かは (反語)

連體形 (用辭語)

(注意) 咏嘆の意味のやは係りとならず。またなむも希望の意を表すものは係りとなることなし。

こそ (指示) ——— 已然形 (用辭)

かく終止の形を左右する助詞を係りと呼び、これら係りに相應する用言・用辭の活用を結びといひ、この呼應の法則を係結法と名づく。

(注意) 口語には係結法全く無し。

[六九]

(イ) 昨日ぞ良き日にこそありけれ  
 (ロ) 君ぞものをや問はせ給ひし  
 係りは必ず一文或は一句の中に二箇以上用ゐる可からず。されば右の例の如きは何れも誤なり。

[七〇]

(イ) 花ぞ散り果てぬれども香は今も残れり  
 (ロ) 何か悪しきとて一人出て立ちぬ  
 (ハ) さこそ口惜しかるべきによくぞ堪へ忍び給ふ  
 (ニ) 花こそ宿のといへるは忠度の歌なり  
 係結法は一文或は一句の中に於いてのみ行はるゝもの



なり。さればイのぞは残りりに係ることなくロのかハのこそ、ニのこそはそれく立ちぬ給ふなりに係ることなし。蓋し所屬の句を異にすればなり。

また係りの屬せる句の述語の言或は辭に連續する場合には述語の語尾はその連續する言辭に従ひて變化するものなり。されば用言用辭の終止形を受くることにて、こも等に連る際の外は係りに對する結びの形は現るゝこと無し。右の例を見て知る可し。

練習

(甲) 左の文に係結法の誤あらば訂正せよ

- 一、年の内に春は來にけれ一年を去年とや言はめ今年とやいはめ
- 二、こゝかしこ野山の花にあくがれて宿の櫻ぞ見ずかなりなむ

三、故郷の海の濱松もとことに波こそ來より君は來まされ

四、敷島ややまと島根も神代より君がためとやかためおきけめ

五、昔も今もかくなむとぞ書きおき給ひしか

(乙) 左の助詞を用ゐて複文を作れ

こそ かは や ぞ か

第十五章 文の解剖

文の解剖

(七二) 文に於ける語句相互の關係を明かにし、文意を了得せむがために、種々の成分に分解するを名けて文の解剖といふ。

以下諸例に就きて、文の解剖を試みむとす。

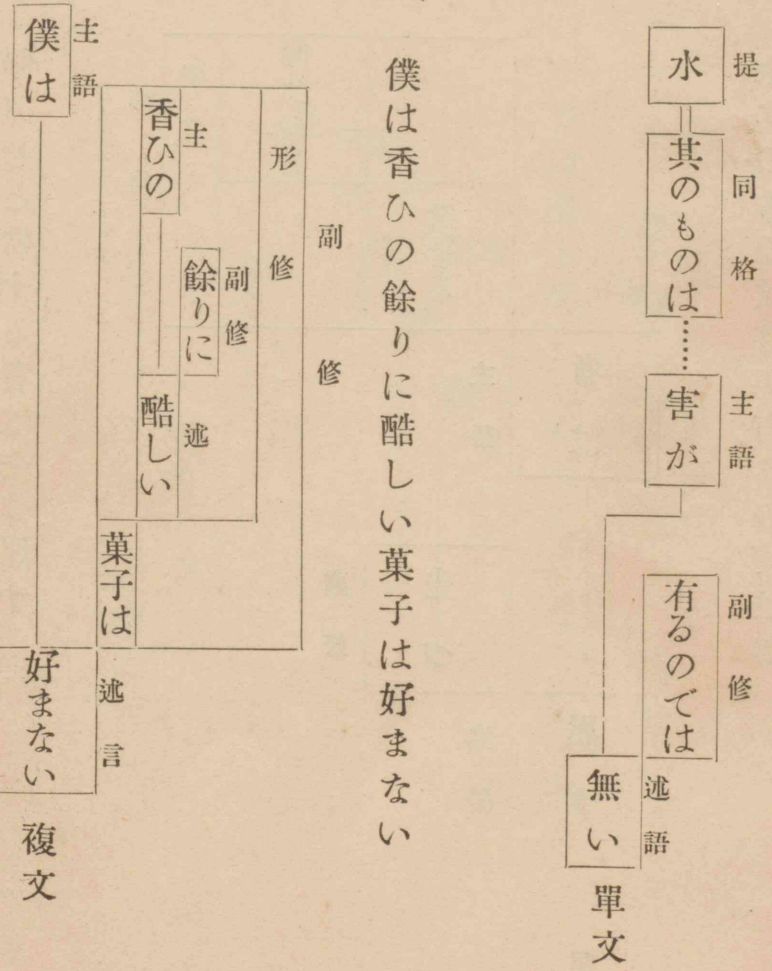






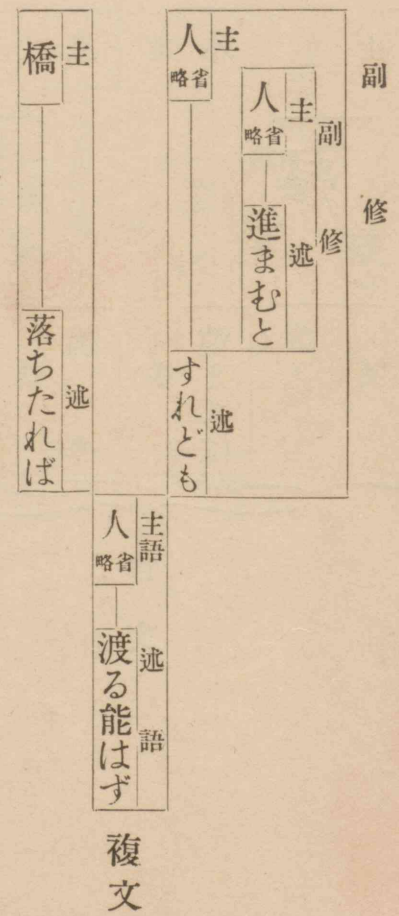
(木)

僕は香ひの餘りに酷しい菓子は好まない



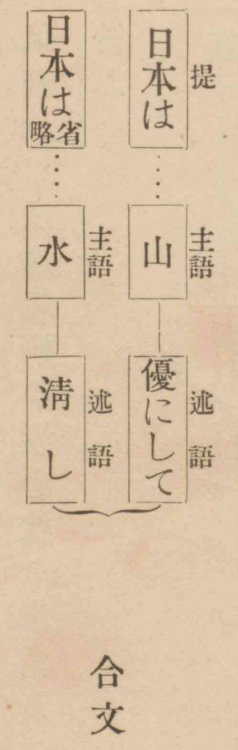
(へ)

進まむとすれども橋落ちたれば渡る能はず



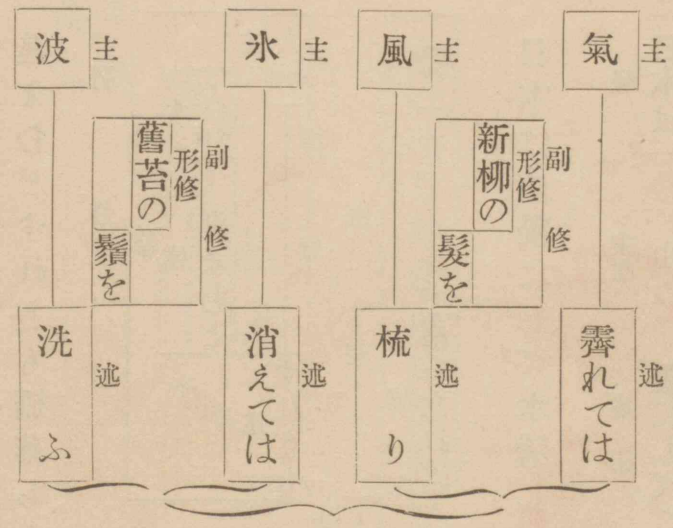
(ト)

日本は山優にして水清し



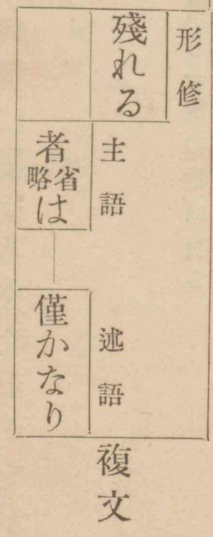
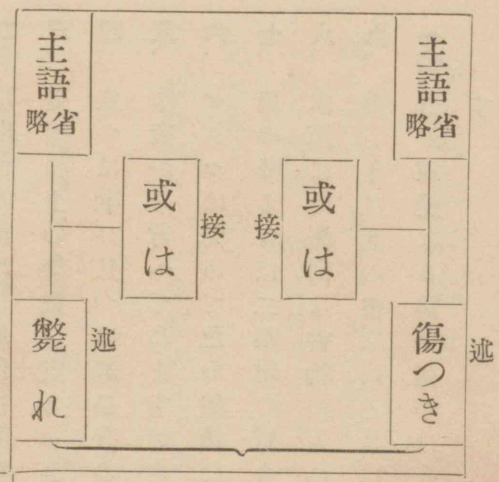


(チ) 鬚を洗ふ 氣霽れては風新柳の髪を梳り氷消えては波舊苔の



合文

(リ) 或は傷つき或は斃れ残れるは僅かなり





(練習) 左の文を解剖しその何種に屬する文なるかを示せ

- 一、試験漸く近づきぬ
- 二、片田舎の寂れた景色にも自ら一種の趣は有る
- 三、憂國の士の惰眠を貪るべき時に非ず
- 四、且つは歌ひ且つは舞ひ夜の更るを知らず
- 五、昨夜から考へてゐますがどうも分りませぬ
- 六、ダリヤは極めて色の種類に富める花なり
- 七、雨の降る日は二割増の賃金を頂きます
- 八、本箱には澤山な書物が入れてある
- 九、委しきは此の書なれど余は寧ろ新説多き其の書を求めむ
- 一〇、吾が親愛なる諸子諸子は今や業を卒へて故郷に錦を飾らむとす

### 日本文典下卷終

### 附録

#### 文法上許容すべき事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四 「コトナリ(異)ヲ」「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ

五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ

妨ナシ



例

手習サス  
 周旋サス  
 賣買サス  
 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サ」ト用キル習慣アルモノハ之ニ  
 從フモ妨ナシ

例

罪サル  
 評サル  
 解釋サル  
 七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ  
 例  
 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

例

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ  
 八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」過シシカバ「  
 ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」過セシカバ「ナドトスルモ妨ナシ」

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ  
 攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ  
 九 てにをは「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ  
 例  
 花ヲ見ルノ記  
 學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ  
 市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ  
 一〇 疑ノてにをは「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ



例

有ルヤ  
面白キヤ  
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

一にてにをはノ「ト」モノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ  
如何ニ批評セラルルトモ  
強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

二にてにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ  
嘲弄セラルルト思ヒテ  
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ  
萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ  
二三語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花  
宗教ト道德ノ關係  
京都ト神戸ト長崎ヘ行ク  
最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例  
史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ  
史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ



一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノヤヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五 てにをはノモハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テトモ或ハドモノ如ク用キ

ルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモアリトモ議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモタレドモ準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモシカドモ昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

一六 トイフトイフ語ノ代リニナルヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨

ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

### 理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其



用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト竝行セシメント期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ未許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス(明治三十八年十二月二日 文部省告示第五百五十八號)

大正四年十一月十七日印  
 大正四年十一月廿二日發  
 大正五年二月十七日訂正再版印刷  
 大正五年二月二十日訂正再版發行

文部省檢定  
 大正五年二月二十三日



著者 吉澤義則

印刷者 鈴木常次郎

發行者 鈴木常松

本日本文典  
 上卷定價 金貳拾五錢  
 下卷定價 金貳拾五錢

東京市神田區表神保町二番地  
 大正市東區南久太郎町三丁目十五番地

發行所 東京市神田區表神保町二番地 振替貯金口座東京二六四四番 修文館  
 發行所 大阪市東區南久寶寺町五丁目甲二番地 振替貯金口座大阪四七一番 修文館



